



市内のあるスーパーでは去年から牛乳パック、アルミ缶、トレーの回収を始めました。9月の回収量はトレー262kg、アルミ缶156kg。「採算面では大変ですが、環境保護も大切です」と店長さん。企業も資源の有効活用に努めています。

ごみは貴重な資源 広がるリサイクル

収集車で集められ、焼かれたり埋め立てられたりしているごみの中には、ダンボールや空き缶、空きびんなど再利用できる資源ごみも多く含まれています。これらの資源ごみをリサイクルすれば、ごみが減って処理費の節約になるとともに、限りある地球の資源を守ることもつながります。

たとえば、紙ごみ一トンを処理するには約一万七千円掛かりますが、再生紙に回せば高さ八センチ直径十四センチの立木二十本分の節

約になります。またアルミ缶を再生して地金をつくる場合は、ボーキサイトから新しく地金をつくる場合の三割の電力で済みます。アルミ缶一個でテレビなら三時間視聴できる分の電気を節約できるのです。

資源リサイクルの動きは、市内でも広がってきているようです。事業所に「紙源リサイクルハウス」を設けて紙ごみを集めたり、スーパーでは牛乳パックやトレーを回収したりしています。また、街頭にアルミ缶の回収ボックスが置かれているのも見掛けるようになっています。町内会や子供会などの団体による集団回収活動も行われています。

資源ごみ回収に

奨励金制度

市では、リサイクル活動を後押しするために、五十六年度に資源ごみ回収に対する奨励金制度を設けました。町内会や子供会、老人クラブなどで資源ごみを集めて、市の指定した業者に引き取ってもらいます。市ではその回収量に応じて奨励金を交付しています。

ごみと収集の移り変わり

大館では、昭和20年代から30年代には各家庭でゴミ箱を家の前に置いていたものです。そしてそのごみは、リヤカーやオート三輪で収集されていました。42年に旧ごみ焼却場ができると、決まった場所へ決められた日時に出すことになり、ここで初めて“燃えるもの”、“燃えないもの”、という分別収集がスタート。家のごみ箱は姿を消すことになりました。

さて、今でいうリサイクルはというと昔は全国どこでもあたり前のこと。生ごみは堆肥に、衣類にはつぎをあて、クズ鉄は集めて売った(?)のもの。もともと日本人は物を大切に、簡単にごみにしてしまわない国民だったんです。少なくとも30年代、“消費は美德”とされるまでは。

せめて20年前の生活感覚に戻れば、ごみも問題にならないような気がします。

町内の協力で 結構集まります



伊藤辰彦さん
(南ヶ丘)

南ヶ丘子供会では、奇数月ごとに資源ごみ回収をしています。集めるのはびん類と紙類の二つ。びんは町内の酒屋さんへ、紙は回収業者へ渡しています。市の奨励金制度も利用して、子供会の活動の足しにしてるんです。毎回大人と子供合わせて三十人以上参加しますし、町内の皆さんも協力的です。子供たちにとってはみんなが集めてる“こと”の意義が大きいようですね。

スタート時は三十八団体で七十三トンの回収量で奨励金も十四万六千円ほどでしたが、三年度は百二十五団体で六百七十六トンの奨励金も二百万円を超すほどになりました。回収日数も延べ三百九十四日になっています。三年度に回収された資源ごみの内訳は、新聞紙や雑誌などの紙類が四百八十ト、金属類とびん類がそれぞれ九十八トずつになっています。市では、今後こうした活動を積極的に支援していきます。

また、市では、これまでの定期収集に資源ごみだけ回収する日を設けることを検討しています。新聞紙、雑誌、ダンボール、アルミ缶を一時預かり所に出してもらい、リサイクルに回していきたいと考えています。